



会津医療センターから こんにちは！



【5】 消化器内科学講座教授
入澤 篤志

『消化器内視鏡のチカラ』

人 体を自動車に例えると「消化器」は何にあたると思いますか？それは「エンジン」です。燃料となる食物を食べ、それを燃やすことによってからだは動きます。

ご飯を食べると、まず胃でよく攪拌（かくはん）し、どろどろの状態にして十二指腸に押し出します。十二指腸では、肝臓で作られる胆汁や膵臓（すいぞう）で作られる膵液などが働いて、食事から栄養分を取り出します。その栄養分が十二指腸～小腸から吸収されて全身のエネルギーの源になります。こうして残ったものが大腸を通り、肛門から便として排出されます。

この一連の流れに関わる臓器に障害を生じたものが消化器病です。そして、消化器内視鏡こそ、このシステムをしっかりと管理・調整するためになくてはならない機器なのです。

上部消化管内視鏡（通称・胃カメラ）は、明治維新の頃、欧米で既に実用化されていました。もちろん今のスタイルとは違って、細い望遠鏡の様なものを胃の中に入れてのぞいていました。科学の発展と共に現在の形になり、今では診断だけではなく、治療にも幅広く応用されています。

会津医療センター消化器内科では、この消化器内視鏡を診療の主軸において、早期発見・早期治療による胃がんや膵臓がん、胆道（胆のう・胆管）がんの撲滅を大きな目標として、日々診療にあたっています。

胃がんは日本人に大変多い病気です。かつては内視鏡の役割は診断だけでしたが、今では、早期がんであれば、おなかを切らずとも内視鏡により胃がんの部分だけを切除する治療法（粘膜下層剥離術：ESD）でがんを完治させることも可能です。膵臓や胆道の病気に対しても、内視鏡は大きな威力を発揮します。

私たちは消化器内視鏡という素晴らしい機器を駆使することで、多くの方を救うことができます。しかし、早期のがんはほとんど症状がありませんので、症状が出てから病院に来られても、かなり進行した状態で発見されるということもまれではありません。症状がないときからしっかりと検診を受けることが、からだのエンジンである消化器に「内視鏡のチカラ」を最大限生かすことにつながるのです。